

紅葉色の希望

104 桐朋高等学校 鉄道研究部

電車のドアが開き、冷たい空気が流れ込んできた。はっと目を覚ます。

少年時代の思い出に誘われてこの地をふたたび訪れたが、人のまばらな寂れた様子に肩を落とした。確かに当時と同じ場所。だけど、僕が噛み締めたかった幸せはもはやどこにもない。

ホームにはポツポツと人の姿があるが、みな浅草行きを待っているのだろう。僕の乗った新藤原行きは、両手で数えられるほどのわずかな乗客と、やけに乾いた晩秋の空気をのせて、軽やかにスピードを上げてゆく。

ぼうっと過ぎゆく景色を眺めていた僕の眼に、ぱっと鮮やかな色が飛び込んでくる。寂れた廃墟の向こうで紅葉が、眩しい西日に照らされて、凛々しくあかね色に輝いていた。思わず息をのむ。

人が消え思い出が崩れても、季節は変わらずめぐるのだ。この不変の真理を前に、何を悩むことがあるだろうか！

列車は橋を渡り、夜の帳が静かに下りゆく。でも、決してとまらない。路続るかぎり、希望はあるのだから。